

鴻 koh

月刊俳句誌

令和元年8月1日発行
(毎月1回1日発行)
第14巻第8号 通巻158号

8 月号

2019



寒山拾得したたるほどの柿若葉

山繭が一つ木曾路の雨の中

旅籠名の袴行灯緑雨くる

百幹の竹百幹の夏の蔭

番所跡露草の丈闇の丈

奉納の妻籠土雛やませ吹く

岩魚焼き中山道のきつね雨

ぼうたんの寺にひつそり宵がくる

朴葉鮓食うべて美濃の走り梅雨

葎切の鳴き熄むことのなかりけり

水辺とは蜻蛉の生るる処なり

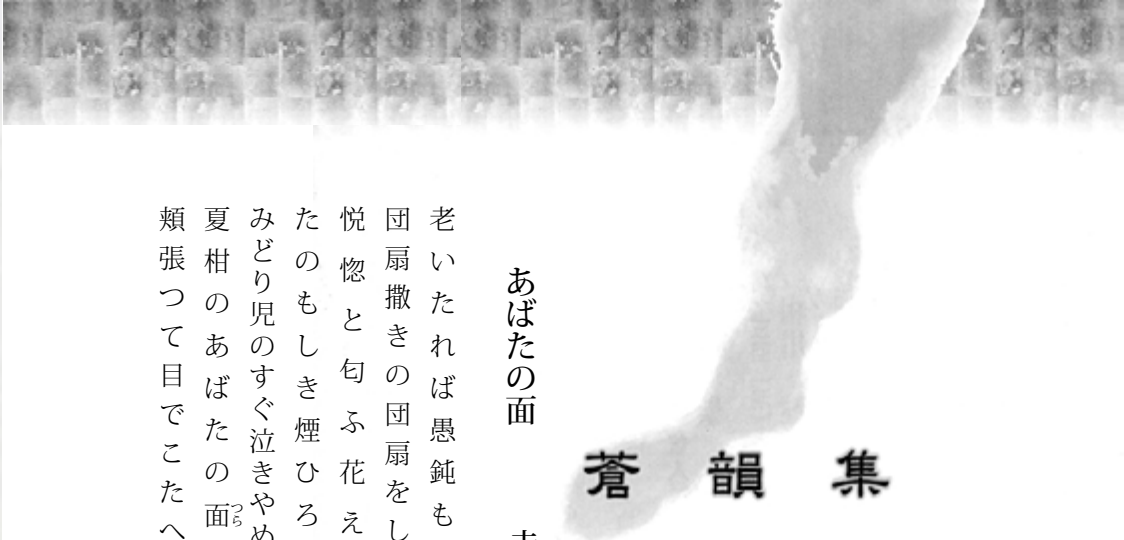
鑑真忌なり欄干の雨湿り

自在たれひとつばたごの若葉どき

自在たれ

主宰作品

増成栗人



蒼韻集

あばたの面

赤峰ひろし

老いたれば愚鈍もよかれ蝸牛
団扇撒きの団扇をしかと車椅子
悦惚と匂ふ花えご伎芸天
たのもしき煙ひろがる蚊遣香
みどり児のすぐ泣きやめりゆすらうめ
夏柑のあばたの面つらを選びけり
頬張つて目でこたへたる葛鰻頭

気泡

横井 遥

母の日の炭酸水の気泡かな
夏の日を纏ひ地下鉄地下に入る
まくなぎは重さを知らず漂へり
筆塚に筆の十本麦の秋
税乗せ鍾馗を乗せて町薄暑
有松や鹿の子絞りの夏暖簾
青葉風真直ぐ有松天満社

花は葉に

石田蓉子

ひそやかな馬酔木の花よ玻璃を拭く
七福神の四人にまみえ春惜しむ
布袋様に笑ひ賜はる五月かな
重曹で磨くスプーン春ゆけり
釣り船のゆるゆる戻る薄暑かな
夢で逢ふことしかできず花は葉に
藤咲くや天保飢饉の供養塔



羽音集

増成栗人 選



ふはふはと揺れる綿菓子風五月 松戸 山岸明子
いちめんのこでまりにある静寂かな
色づきし薔薇の蕾よときめきよ
夕風の来る薔薇の香をのせて来る
春の宵フルートの音の上りゆく
ぽんと抜くワインのコルク春の宵 さいたま 佐藤慧美子
待ち合はず刻を気にせず春シヨール
ゴスペルの練習の音が目借時
川の中大きく泳ぐ鯉幟
棚田千枚つばくろのひるがへる
江戸川の蛇行の彼方麦の秋 松戸 吉清和代
二階より押入の音更衣
一輪の白き花置く夏料理
卵の花垣まぶたの奥の隠れんぼ
若葉寒体操に膝曲げられず
庭仕事まづ朝顔の種を蒔く 土浦 小林和子
早苗束投げて峡の田植系すすむ
昭和の日駄菓子屋に子が五六人
母の日の紐美しきプレゼント
藤の香のここまで届く太鼓橋

詩 作品抄

もの言はずもの考へず草を引く

伊藤真代

古時計ぼおんと麦の秋となる

林 未生

筍流し鳥獣戯画の一筆箋

美濃律子

春風駘蕩遠まはりして帰らうか

五十嵐敏子

ぽんと抜くワインのコルク春の宵

佐藤慧美子

山門不幸泰山木の花の白

横尾かな

船頭のまあるくまるく投網打つ

西條弘子

開ききるぼうたんにある揺らぎかな

立石まどか

揺るとは明日ある証し藤の花

良知悦郎

福耳にリングのピアス夏雲雀

山田世都子

花曇り網走発のフルムーン

中島 宙

初節句六文銭と鹿の角

村手雅子

灯の入る四条河原の涼み床

荒井一代

色づきし薔薇の蕾よときめきよ

山岸明子

和紙工房五月の風を通しけり

佐藤あさ子

水かげろふゆらりゆらりと春の鴨

井上つぐみ

遠郭公山のチャペルの葬送歌

小林良作

花・花・花いつ止まりたる腕時計

山内宏子

たんぽぽや最初はいつも滑り台

青木まゆ美

初夏に開く赤毛のアンの本

野村昌代

佐久間敏高

赤あかし翡しょう翠びん マングローブの森深く
夏雲や浅瀬を渉る水牛車
ガジュマルの片蔭にゐて沖遙か
鉄砲百合ひらき高速艇の水脈
泡盛をロックで斑蝶の昼
板根のうねりて夏の川濁る
三線とユンタに沸きて夕薄暑
ハイビスカス咲いて真白き島の道
具志堅用高像 炎天へ両拳
人は百牛三千の島に虹
峰雲や果てなき珊瑚礁の海
一月に植ゑし田を刈る島は首夏
べた風の洋上にゐて星涼し



旅とは、日常からのささやかな脱出だと思っ
ている。思いがけない出会いがあり、小さな発見がある。
北回帰線に限りなく近い「八重山諸島」は五月の
半ば、すでに盛夏であった。

本句集の巻末の句である。一昨年の四月、「東京句会」浅草吟行の折に「伝法院」の庭園を有志で歩き、開け放たれた書院の奥座敷の床の間のこの二幅の草書の掛軸に出会ったのである。自分は立派な掛軸があるなぐらいいにしか思わず、さして気にもしなかつたのだが、書家としての鋭い感性の持ち主は、書院の中でも最も格式の高い部屋を飾るに相応しい書を見逃すことなく捉え、見事に俳句として一句に成している。「松の芯」の季語が誠に生き生きとして適切な幹旋だと感心させられた。

まずは、現役が多忙極める中で句集を見事完成させたことに敬意を表する。この句集は、強い信念と忍耐の結晶の作であるとも言えよう。この精神は永年培って来た「書」の世界から学びとられたものとも思われ、改めて私もこの精神に学ばねばならないと思った次第である。

「書」の世界も「俳句」の世界も、いや私の好きな落語の噺家の世界などすべてに共通していることなのだと思うが、私は物事には「余白余韻」ということと、「呼吸の間」が大変重要なことだと思っている。

ゆつくりとゆつくりと墨磨りて冬
白檀の墨の香りようらけし

の証と言える。四句目の「筆に背中のあり」という表出には納得させられる。五句目の「馬の字」は、自分で書いてみて、なるほどと合点がいく。六句目は作者の正直さが如実に窺われるユーモアのある一句である。七句目は、書聖・王羲之への憧れを彷彿とさせられる。いずれにせよ肩の力を入れすぎているは良い書作品は出来ないとこのことなのであろう。作者は四十年代早々にして「日展」にも入選しており、書家としての自負と意欲が随所に窺うことができる。これからも精一杯力強い想念を書に注ぎ込んでいつて貰いたい。

句集中には、書家としての体験だけに止まらずこれまでの貴重な人生の歩みをも素直に吐露している。

稲光インクの溶む顛末書
耳痛き話が一つ芋煮会

などの句もあり、忘れられない辛い体験と耳の痛い話の記憶をも素直に表白している。私も現役当時、随分と始末書やらを書かされたものであるが、斯様なことは生涯忘れ得ぬ貴重なものとして頭の隅に残していくべきものであろう。



● 小澤 元



伊藤隆句集『筆まかせ』を読む 「書」と「俳」への弛みない挑戦

宿墨に追磨りをする秋の夜
読点を入れて一息夜の秋
二百十日墨の粘りに筆まかせ

などの句を通して、書家ならではの呼吸の間と余白、余韻をいかに大切にしているかを感じさせてくれている。特に句集タイトルの「筆まかせ」について、作者は肩の力を抜いたしなやかな筆の運びにこそ書の生命というものを認識しているのであり、間の大切さを抜きには語り得ないことと思うのである。これがまた俳句の季語との取り合わせに適切に叶っているのである。

弘法は筆を選べり春の雷
涼新た筆に迷ひのなかりけり
新しき筆の弾力竹の春
春疾風筆に背中のありにけり
馬の字は立ち姿なり寒の入
紙魚二つ隠して筆を入れにけり
霜月夜義之の臨書をきりもなく
篆書には筆順の無し蝌蚪生るる

これらの句も、書家でないと気づくことのない感性である。特に二句目の「筆に迷ひのなかりけり」の断定は、平素の並々ならぬ努力

ひとりでは踏み込めぬ道場浮巢
筍流し来た道をもう振り向かぬ
こだはりを捨てよ糸瓜の垂れ下がる
奇跡など願はず伊勢のお元日
欄干に凭れ春愁とはいかぬ
木枯や両手に持てぬ荷を背負ふ

これらの句も、その折々に体験したことを背景に残されていくべき貴重な句の数々である。彼は実力者揃いの名古屋「はなのき句会」に参加し、常に鍛錬を怠らず旺盛な創作意欲を燃やし続けているのである。俳句を始めて八年という短期間で句集を刊行させたということも、書の世界から学んだ自制と弛みない努力と精進の賜が俳句の世界にも充分に活かされているということである。彼を俳句の世界に導き、熱心に指導された故後藤兼志さんもさぞ喜んでいることだろう。

今後も書家として、更なる大成と飛躍を目指して一層の努力精進を重ねていかれることを期待するとともに、俳人としても益々の研鑽を積み、「鴻」の次世代を担っていく力となっていくて欲しいと願う次第である。

句集上梓誠におめでとございました。

台風の日の中にゐて墨をする

楽庵閑話

虫丸



多様性は互いの共通性
つまり普遍性が
あってこそ
生まれる
ものと
考えれば

先生
俳句は
定型ですが表現の多様に
限界はないんでしょうか



定型を表現の
制約と考えず
多様化の装置
と考えるべき
じゃないのかな

定型という
普遍性のうえに
表現の多様化を探る
文芸が俳句だとモ
いえる

what?



ナルホド!!

超小型の外骨格
という普遍性
つまり定型で
天道虫や龍虫は
紋様が限りなく
多様化しています
昆虫は俳句に
似てますね

カラダモ
ツツカレテ
ルシ



そのすると
ムカデやヤスデは
どうなるんでしょう